〔千載和歌集十六雜〕室の八島をよめる　藤原顯方

たえずたつむろの八島の煙かないかにつきせぬおもひなるらん

〔閑田次筆一〕室のやしまに立煙は、よゝの歌にきこゆ、玄かるに其所を貝原翁の日光の記の附錄に、金崎といふより一里半にして總社村あり、林のうちに總社明神のやしろあり、是下野國の總社なり、其前に室の八島あり、小島のごとくなるもの八ツありて、其廻りはひきく池のごとし、今は水なし、島の大きさいづれも方二間計、其島に杉少し生たり、此島の廻りの池より水氣烟のごとく立のぼるを賞しける也、其村の人あまたに問けるに、今は水なきゆゑ煙もたゝずといへり、と記さる、玄かるに此頃かの國の士の一說を得たり、これは一所にあらず、島と號る所八村俱に都賀郡にて、鯉が島、高島、萩島、大川島、卒島、曲の島、沖の島、仲の島等也とぞ、いづれか是なることを玄らねど、見きくまゝに記す、さて煙ははたして水氣歟、又里の煙歟しらず、室といふは若一所ならば總社村の古名歟、都賀郡の所々をいふとならば、郡內にて室といふ總名ありしにや、辨ふべからず、室といふ名も煙によしあり、

陽炎

〔書言字考節用集一乾坤〕絲遊陽炎也　陽炎智度論疏、陽春之月、有日光風動塵、梵名爲陽炎、此名爲野馬、野馬同事見莊子、遊絲又云風絲、

〔古事記下履中〕爾阿知直白、墨江中王、火著大殿、故率逃於倭、爾天皇歌曰、○略歌到於波邇賦坂、望見難波宮、其火猶炳、爾天皇亦歌曰、波邇布邪迦和賀多知美禮婆、迦藝漏肥能、毛由流伊幣牟良、都麻賀伊幣能阿多理、

〔萬葉集抄十二〕かげろふとは、春に成ぬれば、日のうららかにてりたるに、ほのほのもゆるやうに見ゆる也、いとゆふなど云もおなじ事なり、虫のなかに蜻のちいさきやうなるを、かげろふと云ことあれども、それは別のものなり、それはおぼろげにもみえず、ふかき山のこもりぬなどにぞ侍るなる、今の歌にも蜻火之とかきたれども、これはことばのおなじければ、假字にかきたる也、